| | |
|---|---|
| 研究課題 | ICTを活用した知的書評合戦「ビブリオバトル」の推進 |
| 副題 | ～図書館を「主体的・対話的で深い学び」の場に～ |
| キーワード | ICT　主体的・対話的で深い学び　思考力・判断力・表現力 |
| 学校名 | **山形県立米沢東高等学校** |
| 所在地 | 〒992-0052<br>山形県米沢市丸の内２丁目５番６３号 |
| ホームページアドレス | http:// www.yonezawahigashi-h.ed.jp/htdocs/ |

**１．研究の背景**

本校では６年前から総合的な学習の時間において課題探究学習（通称「i-See プロジェクト」）に取り組んできた。「調べる」⇒「考える」⇒「創る」⇒「伝える」といった一連の学習活動を通して、主体的に学ぶ態度や意欲、協働性、自分の考えをわかりやすく他に伝える、といったプレゼンテーション能力の伸長も図ってきた。普通科高校では先駆的な試みとして評価され、県内外から今も視察が続いている。しかし、現状は探究課題に対する深まりがなかなか見られないことや、プレゼンテーションの機会も限られ、日常での取り組みも困難であるという課題がある。また、2017 年度の全国学力・学習状況調査結果では、次のような結果が明らかになった。

・知識伝達型の一斉授業では、貧困家庭とそうでない家庭の子供たちの間に大きな学力差は見られない。
・活用や探究の学習過程を見通した指導方法を積極的に導入すると、貧困でない子供の学力は大きく伸びる一方、貧困家庭の子供の学力はあまり伸びない。

これは、思考力・判断力・表現力の育成には、知識や技能の蓄積が必要で、リビングに新聞や図鑑が置いてあることや、美術館・博物館に行った経験があるという家庭の持つ文化資本が影響を及ぼしているものと考えられる。子供たちの興味や関心は、「見た」「聞いた」「読んだ」といった経験から生まれることが多く、それらは主体性にもつながる大切なものである。その格差を補う方策の一つとして、図書館を活用した読書教育の一層の推進が挙げられる。

**２．研究の目的**

ビブリオバトルは 2007 年に京都大学で発案され、本と人との出合いを生む「つながる読書」として、近年脚光を浴びている。開催方法はコミュニティ型（少人数）、イベント型（大きな会場で少数の発表者が多人数相手に）、ワークショップ型（多人数を班に分けて各班一斉に）がある。レジュメや原稿を用いないで行うため、プレゼンするには本を深く読み込むことが不可欠である。また、相手を批判したり、中傷したりしてはならないルールとなっており、多様な価値観に触れながら共感力を養うことも期待できる。以上のことから、本研究では読書は家庭の経済格差を縮めるという認識に立ち、**ICT を活用した知的書評合戦「ビブリオバトル」の実践**を通して図書館が知性や人間性を磨くための読書を推進すること、主体的・対話的で深い学びの実現と思考力・判断力・表現力の育成の場となることを考察していく。

## ３．研究の経過

本研究ではタブレットと大型テレビモニターを使用したビブリオバトルを実践した。

・コミュニティ型とワークショップ型のビブリオバトルにおいて各自タブレットを使用し、ビブリオバトルの様子を録画する。

・持ち時間５分間、ディスカッション２分間のカウントには大型テレビモニターを使用し、時間の視覚化を行う。

・各班のチャンプ本について、大型テレビモニターに映し、参加者全員で共有する。

・全員が各自の動画を見直し、自己評価・班員の話し方で参考にしたい点・簡単な感想などをビブリオバトル「評価」シートに記入し、振り返りを行う。

・ビブリオバトルのチャンプ本とそれを紹介している映像が入ったタブレットを図書館の展示コーナーに展示し、本の広報を行う。

**表１　研究の経過**

| 時期 | 取り組み内容 | 評価のための記録 |
|---|---|---|
| 5 月 22 日 | 普及担当教員によるコミュニティ型ビブリオバトルの実践とタブレットによる録画・展示を実施 | アンケート調査・写真・動画（普及担当教員） |
| 6 月 12 日 | 文芸部員によるコミュニティ型ビブリオバトルの実践とタブレットによる録画を実施 | ビブリオバトル「評価」記入とアンケート調査・写真（文芸部員） |
| 6 月 26 日 | ビブリオバトル普及委員会普及委員、貝森義仁氏による校内研修会にてワークショップ型ビブリオバトルの実践とタブレットによる録画を実施<br>【図書委員の他に文芸部員・英語部員が参加】 | ビブリオバトル「評価」記入（図書委員・参加生徒）とアンケート調査（参加教員・図書委員・参加生徒）及び写真 |
| 6 月 28 日 | １年１組がＬＨＲにてワークショップ型ビブリオバトルの実践とタブレットによる録画を実施 | ビブリオバトル「評価」記入（１年１組生徒）と写真 |
| 8 月 25 日 | 文化祭一般公開にて、図書委員会によるワークショップ型ビブリオバトルの実践とタブレットによる録画を実施 | ビブリオバトル「評価」記入とアンケート調査（図書委員）及び写真 |
| 10 月 20 日 | オープンスクールの模擬授業にて、２年次図書委員３名がバトラーとなり、イベント型ビブリオバトルを実施（中学生が投票） | アンケート調査（中学生）と写真 |
| 10 月 28 日 | 全国高等学校ビブリオバトル山形大会出場（２名） | 感想記入（大会出場生徒）と写真 |
| 11 月 27 日 | 教員と図書委員によるワークショップ型ビブリオバトルの実践とタブレットによる録画の実施・展示 | ビブリオバトル「評価」記入とアンケート調査（参加教員と図書委員）と写真 |
| 12 月 | 総括と次年度に向けての計画 | アンケート調査（全教員対象） |

## ４．代表的な実践

生徒の実践は大きくわけて５つ行った（全てワークショップ型)。

①図書委員による実践　②文芸部による実践　③講師を招いた研修会での実践　④ＨＲでの実践　⑤教員との実践（図書委員）

なお、教員も教員同士で独自に実践し、その実践動画を他の教員が校内の共有サーバーにアクセスし、閲覧できるようにした。本校のＨＰにアクセスし、ログインするとチャンプとなった教員の動画をみることができる期間を一定期間設けた。また、動画が入ったタブレットと紹介した本を生徒の生活の動線上にある場所に展示した。

生徒の実践に先行して５月２２日に４人の教員がコミュニティ型ビブリオバトルを実践した。教員が各自動画を撮影して、振り返りを行うためのビブリオバトル「評価」ついて検討した。ビブリオバトル「評価」は、生徒が自分のプレゼンをタブレットで録画し、見直して、次の実践につなげるために振り返りを行うことを目的とした、評価シートである。ビブリオバトル「評価」の内容は表 2 のとおりである。実践を行う際は必ず、前回の実践で記録したビブリオバトル「評価」シートを生徒に渡し、前回の実践で振り返ったことを今回の実践で参考にすることを声掛けした。

**表 2　ビブリオバトル「評価」**

・クラス／氏名／ビブリオバトル参加回数
・自分のビブリオバトルの動画を見て自己評価
A：とてもよい　　（満足できる実践だった）
B：よい　　（おおむねよい実践だったが、練習を重ねるとよい）
C：ふつう　　（実践できているが、工夫や見直しを図り、より発展させるとよい）
D：努力が必要　（課題が多く、工夫や見直しが必要。準備と練習を重ね、改善するとよい）
①声の大きさは適切か（　A　・　B　・　C　・　D　）
②トークのペースは適切か（　A　・　B　・　C　・　D　）
③トークの時間は適切か・５分を使い切ったか（　A　・　B　・　C　・　D　）
④目線やボディランゲージなどは適切か（　A　・　B　・　C　・　D　）
⑤導入や全体の構成は適切か（　A　・　B　・　C　・　D　）
⑥相手に本の魅力が伝わったと思うか（　A　・　B　・　C　・　D　）
⑦総合評価（　A　・　B　・　C　・　D　）
⑧同じ班員のビブリオバトルの発表で参考にしたいことを記入
⑨ディスカッションで自分が質問されて良かったこと、嬉しかったことを記入
⑩感想（今回のビブリオバトルの発表について。前回との比較ができる人は記入）

## ５．研究の成果

ここでは、図書委員と文芸部員の実践回数が最少で２回、最大で４回と、複数回だったため、図書委員と文芸部員の実践を取り上げながら分析する。

ビブリオバトル「評価」は①から⑦までの項目に対して、A「とてもよい」B「よい」C「ふつう」D「努力が必要」の段階別で評価した。うち、⑦「総合評価」に着目して数値化した。例えば、初回参加時の評価がBで、最終参加時にAとした場合は評価が上がっているとして＋１、初回参加時にCで最終参加時にCの場合は変化がないので０、初回参加時にCで最終参加時がDの場合は、－１とした。結果は、表３のとおりである。また、生徒の感想から自分のプレゼンに対して気付きが見られたと考えられる表現を抜粋した。

**表３　ビブリオバトル「評価」⑦総合評価の比較（初回と最終回）**

| 生徒 | 初回と最終回の比較 | 生徒が気付いた感想（最終回）より |
|---|---|---|
| 1 | 0 | 前回より余裕を持って話すことができた。 |
| 2 | 0 | 相手に分かりやすく伝えるために筋道を立てて話すことが大切だと思った。 |
| 3 | +1 | プレゼンは初めは億劫だったけれどとても楽しくて次も頑張りたい。 |
| 4 | −1 | 原稿を見ずに頭の中で話す内容を考えながら発表できたので良かった。コミュニケーションを上手にとりながら発表できた。 |
| 5 | −1 | 人前で話すのは少し苦手だったが、グループの人が頷いてくれたり、質問をしたりしてくれて、話していて楽しかった。 |
| 6 | +1 | 自分の説明は少しぎこちなかった（1 回目）⇒前よりもよく喋った（2 回目） |
| 7 | 0 | 相手の目を見て話すことが向上した。 |
| 8 | +1 | 改善点がたくさん見つかった。 |
| 9 | +1 | 前よりも長く話せた。スラスラ言えたところもあった。 |
| 10 | +1 | 工夫や見直しが必要と感じる部分は多くあったものの、楽しくやることができた。5 分間を使い切れた。 |
| 11 | 0 | 声の大きさが良くなった。 |
| 12 | 0 | 前回よりもリラックスして話すことができた。 |
| 13 | 0 | 話の内容を増やせるようになった。 |
| 14 | −1 | 前回は構成がDだったが、今回は前回よりうまくできたと思う。 |
| 15 | +1 | 時間いっぱい話すことができた。 |
| 16 | +2 | 最初にやった時より上手にできた。次は自分の事をもっと話せたら良い。 |
| 17 | +1 | 導入はすごく良かったと思うので、他の部分を強化させていきたい。 |
| 18 | 0 | 話がまとまらなかったので、練習したい。 |

初回参加時と最終参加時の⑦総合評価の比較を見ると、参加者１８名中８名の生徒の評価が上がっている。８名の生徒は自分自身のプレゼン能力に改善が見られたと感じていることがわかる。一方、７名の生徒は自分のプレゼン能力に変化が見られないと感じ、３名の生徒は能力が低下したと感じていることがわかる。しかし、そのような生徒でも、自分のプレゼンに対して何らかの気付きを感じていることが感想からわかる。また、「評

価」項目⑧「同じ班員のビブリオバトルで参考にしたいことを記入」には興味深い変化がある。例えば、生徒４は数値の上では「－１」と下がってしまっているが、項目⑧の回答は次のようになっている。
【初回参加時⑧の記述】…「発表の構成」
【最終参加時⑧の記述】…「自分の好きな分野の情報を交えつつ、本の魅力を伝えていたこと。」
初回参加時では他者のビブリオバトルの発表に対して漠然としたコメントを残しているのに対し、最終参加時には、より具体的なコメントを残している。これは、ビブリオバトルを重ねるごとにプレゼンに対する理解が深まったことや、関心が高まったことの表れと考えられる。

以上のことから、今回のタブレットを用いたビブリオバトルの実践は、生徒のプレゼンの理解や能力を高めるために有効であったと考える。

加えて、ビブリオバトル「評価」の⑨「ディスカッションで自分が質問されて良かったこと、嬉しかったこと」については、大きく分けて二つの内容が挙げられている。一つは、自分が紹介した本についての、「読んだことがある」「続きは何巻まで出ているか」といった発言や質問から、自分が紹介した本に興味を持ってもらえたと感じたという類の内容。もう一つは、自分が話したことを受けての発言や質問が嬉しかったという類の内容である。総じて、自分のプレゼンに共感してもらえたことを１８名全員が記述していた。⑧、⑨の記述は「聞く」意識が働かなければ記述できない。記述が多かったことから、今回の実践を通して生徒の聞く立場での意識を育成することができたと考える。

次に図書委員の生徒に１年間のビブリオバトルの実践でどのようなところが向上したかをアンケート調査したところ、以下のような回答があった。
・人前で発表する時の声量が上がった（３名）
・話の内容を増やせるようになった
・初めは緊張することが多く、思うように話せないことが多かったが、今では伝えたいことをしっかり話せることができるようになった
・５分間を使いきれるようになった／雑談などを入れて時間いっぱい話せるようになった（４名）
・相手の目を見て話せるようになった
・どうやったら相手に伝わりやすいかを考えることができるようになった
・人前で話すときにあまり緊張しなくなった

これらの記述を見ても、タブレットで自分のプレゼンを振り返りながら、ビブリオバトルを繰り返す中で、生徒達は自分のプレゼンに自信をもっていったことがわかる。

校内研修会、クラスでの実践後のアンケート記述には、「楽しかった」「紹介された本を読みたい」「またやりたい」という肯定的な記述が多かった。

次に、実践した教員のアンケートに寄せられた意見を挙げる。
・生徒の実験を録画、撮影して、それを基に結果をプレゼンしようと思う。（理科）
・今回の試みで、是非オンラインでビブリオバトルをやってみたいと思う。（情報）
・iPad は教科の授業でも非常によく使っている。技能の撮影で課題を検討させている。（保健体育）
・授業では多岐にわたる分野を学ぶので、教科書にない内容については iPad は非常に有用である。（英語）
・数学においては立体など三次元空間をイメージさせるのに非常に良い。（数学）
・「話すこと・聞くこと」の活動の総合評価に iPad が使える。（国語）

これらの記述から、教員それぞれが、iPad やビブリオバトルを今後の授業実践で活用する展

望をもったようだ。

校外での実践として、２名の生徒が全国高等学校ビブリオバトル２０１８山形県大会に出場した。日々のビブリオバトルの実践が功を奏して、１名は優秀賞を受賞した。

【全国高等学校ビブリオバトル 2018 山形県大会】

【オープンスクールでのビブリオバトル】

## ６．今後の課題・展望

ビブリオバトルを体験した生徒、教員は、ビブリオバトルの魅力と効果を知ることができた。一方で、多忙であるなどの理由からビブリオバトルに参加しない教員や体験したことのない生徒にビブリオバトルにいかに参加してもらうかは課題である。これを次年度の課題とし、さらなる実践と普及に取り組む計画である。また、読書活動や読書教育の成果は数値化しにくいということも実感したため、よりよい研究方法についても随時検討していきたい。

## ７．おわりに

パナソニック教育財団の皆様、ビブリオバトル普及委員会の貝森義仁様を始め、今回の研究を支えてくださった多くの方々に感謝申し上げます。

## ８．参考文献

・谷口忠大（2013）『ビブリオバトル　本を知り人を知る書評ゲーム』
・須藤秀紹／粕谷亮美（2016）『読書とコミュニケーション　ビブリオバトル実践集　小学校・中学校・高校』
・谷口忠大（2016）『コミュニケーションナビ　話す・聞く①やるぜ！ビブリオバトル』